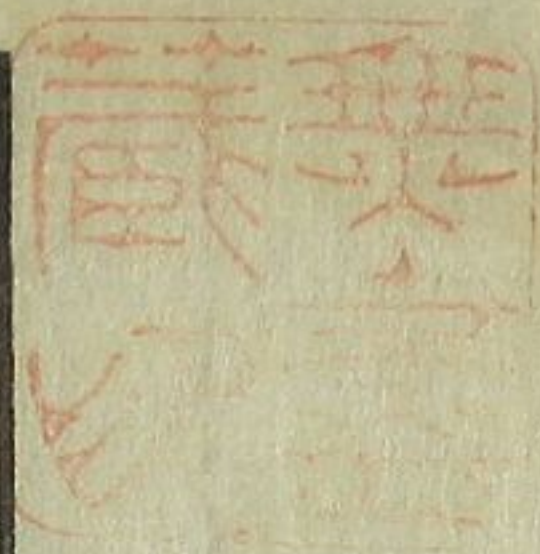


中外新聞

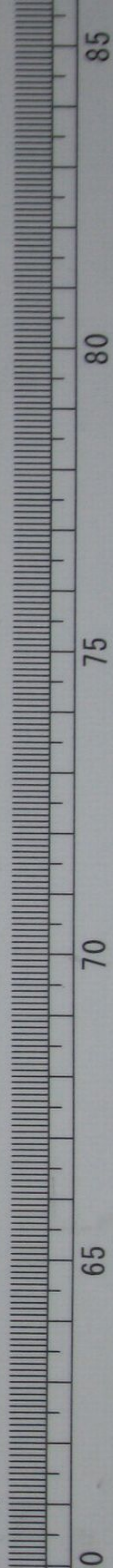
外篇

二



定價一匁

西垣文庫
文庫 10
7328
2



特 文庫10
7328
2



中外新聞外篇卷之二

慶應四年四月

○各藩歎願書

謹て奉言上（私とも）後先祖以来徳川家臣属（有之）一
共普（天率）土王臣土土の儀（有之）况や累代過分の官位封秩
頂戴（罷在）奉蒙莫大の天恩（以）共今般 御政事（一）新万
の稗補（も）無之恐惶戦慄仕罷在（然）去る正月三日不
徳川氏當主入朝折柄先驅の者共行違より意外の戦争近
畿の地（於）於て炮烟を動（以）殺承知仕一同驚愕失錯罷在（外）
終（り）此度奉蒙 此冥怒（由）追討（は）仰出（し）殺（す）當主不束



より生い事今更弁疏可仕様も無之に得共元來當主俊ハ
先年來先朝非常の寵眷をも奉蒙決て二心無之段ハ天地
神明も照覽を為在億兆の人庶も承知仕ハ俊ハ座ハ下然
一時号令不嚴の處より右等の不始末も及ハ段ハ重々奉恐
入坂城も急速退去江戸帰城後も恐惶謹慎罷在先祖墳墓の
佛寺へ剛居仕ハ次才私共徳川氏恩意を受罷在ハ身分も取
以てハ実ハ片時も坐視傍觀罷在ハ不忍何卒天地覆載の
由仁慈を以寛宥の由處置ハ仰出ハ様仕度奉願ハ下然私
共徳川氏ハ附屬罷在ハ身分も今般の義如何も諫争抑
止可致善の処其義も不及段多罪の身を以歎訴仕ハ義非分

を不顧奉恐入ハ一其何分ハ前文中上ハ當主謹慎恐惶の
義も有之且ハ徳川氏祖先奉對朝廷恭順の道を尽ハ乱を
平け治を致ハ奉安宸襟ハ微勲を思召不仕為捨何卒格別
の由恩典を以て寛恕の由沙汰仕成下ハハ獨り徳川氏
再生の由恩沢のみあらハ関東諸州百万の生灵鋒鏑の難も
相免も盛大ハ復古の由盛道も可仕為称と下恐蟻蝥織芥
の微衷ハ酌取仕下置幾重もハ執奏の儀泣血流涕奉哀訴
懇願ハ恐惶敬白

二月

右ハ小田原侯佐倉侯を始四十三藩の歎願書の由三月二

日各藩名代の重臣等 太政官弁事所へ奉りしと云ふ

○ 無題

作者不詳

血淚凝成一篇字、孤臣哀苦萬重深、精誠聞說透金石、聖主何
況天地心、 或曰櫻藩 依田朝宗之作

右哀詠の為り上京又付ての作のよし

○

去る二月廿日會津侯国許へ発足の節上野山門前三橋の辺
りて下乗山門の方へ向ひ良久しく遥拜し致家来共ハ悉く
下座罷在其後出立相成以上野辺通行の者并又市中の輩ら

不覺感涙を流し

述懐

作者不知

自古英雄多數奇胡為大樹棄連枝、斷腸三顧許身日、揮淚南柯
入夢時、萬死報恩志未遂、半途墜業恨何涯、暗知氣運推移去月
黑橋頭啼子規 或曰 會津侯之作

○ 鈴木縫殿持卷 勅書の由

一 先年以來

此沙汰の趣も有之以処贈大納言の遺志を失先代謹責
の奸人共致登用加之徳川 諫争の道も不行届今日の
次第に至り以処如何よし

思召以速_ニ鈴木石見市川三左エ門初_ニ奸人共加_ニ嚴_ニ罰_ニ忠_ニ邪_ニ
の弁を明_ニ藩_ニ屏_ニの任を不失_ニ様_ニ處_ニ置_ニ可_ニ致_ニ
以沙汰の事

○
成瀬隼人正

竹腰 龍若

今般一新_ニ付可_ニ為_ニ藩_ニ屏_ニの列_ニ在_ニ 仰出_ニの事

但_ニ是_ニ迄_ニ取_ニ扱_ニ来_ニ以_ニ国_ニ政_ニ向_ニ難_ニ手_ニ放_ニ儀_ニ以_ニモ_ニ其_ニ旨_ニ領_ニ主_ニへ

願立可申_ニの事

尾紀水三藩_ニ附_ニ属_ニ五_ニ家_ニの輩已来可_ニ為_ニ藩_ニ屏_ニの列_ニ事

○持平論

天下の勢た_ニ一_ニハ_ニ權_ニ衡_ニの如_ニ其_ニ平_ニを得_ニざ_ニれ_ニバ_ニ治_ニま_ニら_ニ以_ニ前_ニ
は徳川氏獨_ニり_ニ政_ニ權_ニを專_ニら_ニま_ニせ_ニら_ニば_ニ其_ニ勢_ニ過_ニ重_ニあり_ニ故_ニ又_ニ諸_ニ
侯_ニ多_ニく_ニ之_ニを_ニ服_ニせ_ニば_ニ徳_ニ川_ニ氏_ニも_ニ亦_ニ自_ニら_ニ其_ニ非_ニを_ニ悟_ニり_ニて_ニ王_ニ政_ニ復_ニ古_ニ
の事_ニら_ニり_ニ之_ニより_ニ輕_ニ重_ニ宜_ニし_ニき_ニを得_ニて_ニ国_ニ政_ニ大_ニに_ニ治_ニま_ニら_ニぶ_ニき_ニ機_ニ
會_ニあり_ニし_ニを_ニ惜_ニ裁_ニ日本_ニ開_ニ化_ニい_ニ中_ニに_ニ足_ニら_ニざ_ニら_ニざる_ニの_ニ故_ニや_ニ所_ニ謂_ニ三_ニ
藩_ニあり_ニ者_ニ俄_ニに_ニ政_ニ權_ニを_ニ擅_ニま_ニせん_ニと_ニま_ニる_ニの_ニ心_ニを_ニ生_ニし_ニま_ニれ_ニバ_ニ竟_ニ
は正月三日の戦争を生むるに至り此戦の元来三藩の專_ニ
横_ニり_ニ起_ニり_ニし_ニ有_ニと_ニ其_ニ勝_ニ利_ニを得_ニし_ニ日本_ニの_ニ幸_ニあり_ニ如_ニ
何_ニと_ニま_ニれ_ニバ_ニ徳_ニ川_ニ氏_ニ若_ニし_ニ勝_ニ利_ニを得_ニハ_ニ其_ニ勢_ニま_ニる_ニ後_ニ前_ニの_ニ如_ニく_ニ過

重に至るべきに必然ありければなり扱徳川氏敗退の後三藩の勢過重に至るに自然の理ありされど此時三藩の徒退て政を修め盈を持し満を保つ心の心ならず亦善く其平を失はざらば更に更其心あり勢を乘して関東を劫奪に至りし平を失ふに最も甚しきなり此後いかに成行くべきや我が知る所は非ざると雖も姑く理勢を推して之を察するに三藩の徒此上あり不徳川氏を削殺し東方の士民を凌辱せんとし至らば其勢過重不堪へ自ら破れざるに必す會津の為破らるべし現在會津の兵防戦の企あると一會津の地嶮入勇田の知る所あり三藩之を伐つと雖も強弩の末恐ら

くハ之を破るに能はざらん試問ふ三藩果して之を破るに能はらんば如何答曰三藩を過重の勢を失ひ東方の過輕の勢を復し大勢平均して再び日本の大に治まらばき機會あらん是れ我等が国の為は希ふ所あり又問三藩の力能く會津を破らば如何曰く其勢遂に日本国中を鉗制するに至らん然れども是は天下を治むるの道は非ざり且つ外国交通の世は在りては決して行ふべからざるを我々の禍亂の底止まる時を知らば

○ 題しらん

とく下り

む
よー野山あり木の櫻過一世をまゝ見んこと紙花やかき

